

救急處置(承前)

醫學士 長瀬復三郎

火傷。火傷は其輕重によつて其様子が異つて居ります。即ち尤も輕きものは皮膚が赤くなつて其部分に痛を覺えるはかりでありますが進んでは火ぶくれを生し、尙進んでは靡爛し、甚しきものに至つては炭化するものであります。火傷の輕いものは生命に關することはありません、けれども全身の三分の一以上の火傷に達しますと生命を失ひます。

火傷の尤も輕い場合即ち皮膚の赤くなつた時は僅の冷審法で癒すことが出来ます。又稀薄の硝酸銀液を用ゐても治すことが出来ます。次に火ぶくれの出來た場合には針で其皮をつきて中の水を出し胞膜は殘して置いて、これに藥を塗るのであり

ます。次に靡爛した場合には醫の手を假らなければなりません。ことに大火傷に至つては云ふまでもなく醫者の手をまたなければなりません。

兵卒等が永く行軍して太陽の烈しい熱のために日射病を起して痛を生し人事不省となることがあります。この時は冷かな、よい空氣の中にいれて人工呼吸法を行ひます。

又雷にうたれて卒倒することがあります。即ち其突然の驚愕のためにすると雷のために震死するのとあります。第一の場合には人工呼吸法を行ひ第二の場合には火傷の手當をなすべきでございます。

凍傷。これは寒冷のために身体を損傷するのであります。シモヤケといふのは手足の指先又耳などがあります。シモヤケといふのは手足の指先又耳などが

紫色になつて靡爛するのであります。甚しき者に至つては皮膚が蒼白となり、呼吸とまりて人事不省に陥ることがあります。凍傷にかゝつた場合に急に温き室に入れ又は火、湯などを以て其凍傷した所を温めるのは甚た害があります。漸次に温めることが必要であります。即ち先づ最初には冷な室に入れ水を以て皮膚を摩擦し稍温氣が生ずるに至つて衣服を着け稍温き室にいれ、又稍温き湯に入れば、次で漸次温度の高き湯に入れ呼吸の回復を計るのであります。斯様にして呼吸の回復した後は、アルコール性の興奮劑を與へます。其時に若し手足などが潰爛したる時は速に切斷しなければなりません。而して此の凍傷の患者を取扱ふ時に特に注意すべきことは急に温めぬ様にするのであります。

今いろは料理

(のの部)

石井泰次郎

海苔はいろ拵方

能き海苔を、一寸餘の四角形に切りて、ぐるぐる
と管に巻いて、美濃紙をほそくたたるにて、一寸
とめて、焙爐にかけて、茶釜にて醬油をふりかく
べし、さてかく乾かして用ふ、

のし鳥の拵方

鴨のれろし身を、庖丁刀にて能々ふし、鴨一羽の
身へ、魚の摺身(魚の身をおろして搗盆にてすり
たる)鶏卵ほど能く合せておしませ(玉子は白味)
酒醬油を貝抄子に七八分目はど入れて、能くふし
ませ、半辨をつくる如くしてむらなくのして、煮
えたる湯をさつとかけてよし、鳥の身は鴨にかぎ
らざ、